

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ストライクウィッチーズ 第44機械化航空団

【作者名】

葉缶飛行

【あらすじ】

1939年、突如として出現したネウロイはオストマルクに侵攻を開始した。

ネウロイは先の第一次ネウロイ大戦時とは比べ物にならないモノで人類を、国土を蹂躪していった…。

第1話

1944年2月ガリア

第二次ネウロイ大戦、1939年に出現したネウロイはオストマルクに突如侵攻を開始した。

ネウロイは第一次ネウロイ大戦時より強力なモノとなり人類は撤退に次ぐ撤退を余儀なくされていた。

ガリアの2月の薄く空を覆う雲の下を8機の戦闘機が轟音を響かせていた。流れるようなフォルムと機首の下にエアインテークが特徴的な戦闘機、F 16Cファイティングファルコンだ。様々な作戦に従事できる優秀な戦闘機である。

『バットアイよりグリフォンリーダー、敵機が緩衝空域に侵入した。防空ラインまであと45マイル、交戦を許可する』

上空で管制をしているAWACSからノイズのまじった管制官の声がグリフォンリーダーに状況を伝えた。

『グリフォンリーダー、了解』

グリフォンリーダー 駆るF 16は増槽を捨てバンクをとった。

『グリフォンリーダー、ボギーは4……いや5だ』

『了解——グリフォンリーダーより各機、敵機迎撃ラインに侵入。中距離ミサイルを使用するぞ』

『グリフォンリーダー エンゲージ、FOX3 FOX3』

F 16の主翼下のパイロンに装備されたAIM 120 AMR AIMがリリースされロケットモーターに点火し白煙を吐きながら黙視外の敵機に向かう。ほかのF 16もそれに続くようにAIM 120を発射する。放たれたAIM 120は、ハニカム構造の黒と赤の装甲に覆われた大型タイプのネウロイに命中した。

『グリフォンリーダー、ネウロイのコアは依然健在だ。コアを破壊し撃墜せよ』

『エレメントに分かれ各個撃破だ。グリフォン2、ワレに続け』

グリフォンリーダーは編隊各機に命令を下すと、F 16は2機ず

つこのエレメントを組み編隊を崩した。

『リーダー機数が増えたっ？バットアイどういうことだっ？』

リーダーを見たグリフォンリーダーは目を疑った。敵機を示す光点が5つから7つに変わっているのだ。

『奴ら大型機の腹の下に張り付いていやがった！』

『くそっ』

グリフォンリーダーはアフターバーナーを点火した。ドンツと衝撃後に機体は加速を始める。そしてドツグファイトモードのスイッチを入れる。

『エネミータリホー』

グリフォンリーダーは肉眼で敵機を捉えた。三角形を幾つか組み合わせような主翼に二枚の垂直尾翼を持った黒と赤のジェット戦闘機だ。ネウロイとの航空戦において最も遭遇するタイプであり制空戦闘機に相当すると考えられている。このネウロイにはコアはなく、ある程度ダメージを受けると霧散するように消える。

『グリフォン4が喰われた！』

グリフォンリーダーがグリフォン4のF 16を見ると火を吹き上げ左翼をもぎ取られていた。

『やりやがったな』

グリフォンリーダーのF 16はネウロイの背後をとるとAIM 9 サイドワインダーを撃つ。AIM 9はネウロイに直撃し爆発を起こしながら霧散した。

『メーデー、メーデー被弾したあつ』

僚機のパイロットの断末魔のような叫びが無線から入る。

『グリフォン7、消火しろ！フェールカットだ！』

しかし、グリフォン7からはノイズだけで答える声はなかった。

『っー』

グリフォンリーダーは声にならないような叫びを抑え新たな敵機を見つけ出し背後に食らいついた。

2機の垂直尾翼に白い狼のエンブレムを描いた双発の戦闘機攻撃

機F/A 18Cホーネットがゆったりとした速度で薄く曇った空を下を飛んでいた。

『ロシユフオール基地よりフェンリル編隊へ、グリフォン編隊がネウロイと交戦し劣勢だ。支援に向かってくれ』

『命令拒否とかは無理なんだろう？』

男は少しうんざりしたような声音で言った。

『さすがはアフリカの空を知ってるラインハルト大尉は違うね。理解が早くて助かる』

茶化すように管制官は言った。

『イーフェンリルリーダーからロシユフオール、燃料があんまりない、タンカーを待機させておいてくれ』

『了解だ。でもあんまり期待しないでくれ』

『オーダー追加だ相棒』

射出座席に収まった男イーラインハルト・シュツルムは、酸素マスクを付け直し自分の右後ろを飛んでいるF/A 18を見て言った。

『イーラインハルト、お前はもう少し他人を気にかける、特にオレを』

イヤフォンからフェンリル隊の2番機をつとめているエドガー・エーザウ大尉が言った。

『何言ってる？お前も食いたりないだろう、うすのろの地上目標なんて』

彼らは、国連軍第7航空軍団麾下の第44機械化航空団所属の傭兵である。ガリアの西部のロシユフオール空軍基地を拠点に主に航空作戦によりネウロイの西進を食い止めている。

『まあ確かにな……。安い地上目標よりは稼げるからな』

エドガーはマスクを付け不敵に笑っ。

『そつだろ？』

ラインハルトはそう言いながら、マスターアームのスイッチを入れた。

『もう稼ぎするか』

2機のF/A 18は進路を変え赤い炎をエンジンから噴き出さ

せ一気に加速した。

ネウロイ制空戦闘機とF 16は激しいドッグファイトを展開していた。そんな中、ネウロイがグリフォン2のF 16に喰らい付いた。グリフォン2のF 16は、機体を左右に滑らせるように振りながらネウロイからのロックオンさせないように機動をする。

『クソッ！後ろにつかれた!!』

グリフォン2は身をよじるように自機の背後についたネウロイを見た。

『グリフォン2、ブレイクしろ』

『わかってるっ』

僚機のパイロットがグリフォン2に回避を呼びかける。

グリフォン2右に弧を描くように回避機動をとるがネウロイはグリフォン2のF 16に張り付きながら黄色の曳航弾をグリフォン2のF 16に放つがかすめそうになりながら曳航弾は飛び抜けていく。

『メーデー、メーデー助けてくれっ』

『待ってるっ』

グリフォン2は味方に支援を求めつつ再び回避機動を取ろうとした時、聞きなれない声が聞こえた。

ラインハルトのF/A 18は上層の雲を突き抜け急降下をしネウロイ制空戦闘機タイプの後方を滑り込むようにして占位した。そしてトリガーを絞る。F/A 18にの機首に装備されたM61A1バルカン砲は咆哮をあげると20m砲弾を撃ち出しネウロイの装甲を引き裂き爆発と同時に霧散させた。

『間に合ったみたいだな』

グリフォン2のF 16のとなり白い狼のエンブレムを描いたF/A 18が並走するように現れる。

『た、助かったよ...』

安堵した声でグリフォン2は言った。

『まだ、敵はいる。気を抜くなよ』

ラインハルトのF/A 18はグリフォン2のとなりを通過しながらラインハルトはグッドラックサインを送った。

『そっちもな』

グリフォン2もグッドラックサインを送り残ったネウロイを見つけるために上昇した。

一方エドガーは、F/A 18の低速での高い機動力を生かしネウロイの後ろをとった。ネウロイは回避機動をとるがこの速度域ではF/A 18のほうが有利である。

『逃がすかよ！フェンリル2、シーカーオープンFOX2FOX2』

主翼の端のパイロンに装備されたAIM 9が発射されネウロイの主翼を吹き飛ばし霧散させた。

『スプラッシュュ!!』

エドガーは小さくガッツポーズをとった。

『バットアイより、交戦中の各機へ制空戦闘機タイプの全機の撃墜を確認した。大型タイプはウィッチ隊が片付けるとの連絡があった、全機帰投せよ』

空中管制していたバットアイからグリフォン隊とフェンリル隊に通信が入った。

『どつやらオレたちは主役登場までの咬ませ犬役だったらしいな』

各機がAWACSからの指示で戦闘空域を離れていく中、エドガーはラインハルトのF/A 18の右後ろに付き編隊を組み少し残念そうに言った。彼としては1番稼げる獲物を撃墜出来ず少し悔しいのだらう。

『咬ませ犬というか、予算獲得のパフォーマンスだな』

ラインハルトは冷めたような口調で言った。最後にネウロイの大型タイプを撃墜したのはウィッチの戦果になり、戦闘機の戦果は小型タイプを複数撃墜したがこちらは3機の戦闘機を失い任務も完遂できてもいない。

『……ふざけるなっ!!どうして今帰投しなきゃならないんだ!』

グリフォンリーダーがAWACSの管制官に怒気を含め口調で問う。

『国連軍航空歩兵司令部からの命令だ。我々には命令に従うことしか出来ん…』

『味方が…仲間が死んだだよ…！なのに仇もとれねえのかよ…』
グリフォン隊はこの戦闘で8機中3機を失った。

このガリア西部空域の戦場ではこの程度損害は日常的である。そのため中隊定数を満たしていない機械化飛行中隊も珍しくない。

ガリア・ロシユフォール空軍基地

ガリア西部のロシユフォール空軍基地、ネウロイとの最前線基地でもある。この基地には国連軍第7航空軍団航空軍団第44機械化航空団が所属している。

ウィッチは一人も所属していない、戦闘機だけでネウロイに対して作戦を展開している。

「見事な着陸だな」

エプロンで豊かな金髪を風になびかせる女性佐官アイリス・プリーラー大佐はその碧眼で白い狼のエンブレムを持つF/A 18の着陸を見つめていた。

「大佐、あまり私の部隊にちょっかいを出さないで下さい」

栗色の髪を大きなポニーテールで結んだ幼さの残る少女カティア・シュヴァツハイム中佐は呆れるように言った。

「シュヴァルツハイム中佐、私がいつ君の言う部隊の 隊長 にちょっかいをかけたのだ？」

「どうして、隊長なんですか…」

「そうか、そう言うなら問題ないな。それに本来アレは私の『モノ』だ、余計は真似はするなよ？小娘」

アイリスは不敵な笑みをカティアに向け言った。

「うっ…」

ラインハルトは愛機のF/A 18をエプロンに駐機させた。

「どっにか帰ってこれたな」

ラインハルトは燃料計を見て言う。そしてヘルメットをとりラ

ダーで機体から降りた。

「オレたちの獲物を奪ったウィッチの部隊ってどこの奴らだよ……」

エドガーは機体から降りたラインハルトに声をかけた。

「ご苦勞な連中だ。のこのご制空権も確保できてないような空域に出張ってくるなんてな」

「ったく、余計な事しやがって……。今夜はまともな飯にしようと思っただのに」

ラインハルトはエドガーのいつものように愚痴を聞き流しながら B 15 フライトジャケットからサングラスを取り出し掛け、片手にヘルメットをぶら下げながら司令部へのエプロンを歩き始める。

「……でも、あの援護した部隊……グリフォン隊だ。あいつらも気の毒だな、撃墜された味方の仇も取れないなんてな……」

エドガーはグリフォンリーダーの言葉を思い出し言う。

「合理的な判断でもないしな。納得も出来ないだろうな……」
そして続ける。

「どこのこの部隊のボスや飛行隊長みたいにはいかな」

エドガーは息をつくように言った。

「ああ……」

ラインハルトは司令部に目を移した。

ブリタニア国連軍欧州司令部

「連中は何をやってたんだ!?!」

国連軍第7航空軍団総司令官、ウィリアム・カニングム中將は応接用のソファァーに踏ん反り返り葉巻を吹かしていた。

「航空歩兵司令部と機械化航空軍団司令部では前者のほうが上位ですから……」

「自分たちでは制空権すら確保できない奴らが偉そうに……もう戦争のあり方は変わってしまったことを認めるべきだ」

カニングムはイライラと葉巻を吹かながら過去の自分が参加したネウロイ大戦を思いだしていた。

カニングム中將は第一次ネウロイ大戦を戦闘機乗りとして従軍し

ていた。当時の機械化航空部隊の任務はウィッチの露払いであった、視程外ミサイルを放ち離脱する、これだけであった。しかし第一次ネウロイの末期、ネウロイはジェット戦闘機に相当する兵器を投入してきたのだ。音速を超えたネウロイにはウィッチは手も足出なかった、機械化航空部隊はミサイルキャリアーとしての能力に特化した戦闘機では機動性の高いネウロイの餌食となってしまうのだ。そして一時的ではあるが人類の制空権は一部が喪失し地上部隊は壊滅的打撃を被った。人類は当時の最新鋭の戦闘機を投入しどうにか第一次ネウロイ大戦はしのいだ。

現在の大戦ではネウロイは制空戦闘機タイプを投入を全面的に行っているようだ。ウィッチだけでは戦えない、もちろん機械化航空部隊だけでもだ。

「……しかし中将、コニャック・シャトーベルナル基地及びロシユフォール基地の損耗率が高くこのままでは絶対的な制空権の維持は難しいです」

カニンガム中将は意識は副官の声により現実へと戻された、そして手渡せられた報告書に目を通していく。戦闘機部隊の損耗これが意味するものは、制空権の喪失、制空権が仮に奪われるとネウロイの攻撃機により前線の地上部隊に被害が拡大してしまう。

「ネウロイの前線基地を叩く必要もあるのかもしれない」

カニンガム中将は煙を吐きながら言った。

「そうになるとネウロイの対空陣地も叩く必要もありますね」

「一つの選択としてこの作戦を考えておくか……。根回ししておく必要もあるな……」

カニンガム中将は葉巻を口から離し息をつき、葉巻の火を灰皿で押しつぶし消した。そしてゆっくりとソファアールから立ち上がり、夕日が射し込む窓際へあるいて行く。

「根回し、か……。欧州が壊滅的な状況であるのに人類は一つになれないか、この戦争は何に向かっていくのだろうか……」

カニンガム中将はオレンジ色の夕日に照らされながら言った。